

座席位置における年齢差と自我構造

豊田 弘 司 奈良教育大学学校教育講座 (心理学)
多根井 重 晴 青森大学薬学部

Age Differences in Seating Position and Structure of Ego

Hiroshi TOYOTA

(Department of School Education, Nara University of Education)

Shigeharu TANEI

(Department of Pharmacy Aomori University)

Abstract

The present study examined to clarify the age differences and the relationship between choices of seating position and structure of ego. Participants consisted of the three age groups: the undergraduates, the middle age and the older age. They were asked to choose a seat in 3 contexts: one of 12 seats located around the square desk in a party situation; one of 5 seats in front of the interviewers in an oral examination situation; and one of 5 seats arranged with 2 opposite the other 3 in a debate situation. Sub-scale scores for egogram were compared among the participants who selected each seating position. In the party situation, the age difference was observed in choosing the seating position. Namely, the participants in the middle- and the older-age groups chose the lower seat more often than those of the undergraduate group, whereas the latter groups did more the seat located close to the head of the table than those of the former two age groups. Undergraduates chose the seat on the 2-seat row more often than the seat on the 3-seat row in the debate situation, whereas the participants in two age groups did the latter seat more often than the former seat. The clear relationship was observed only between seating position and Adapted Child (AC) score. Namely, AC scores for the middle and the older age groups who chose the seats located close to the head and the center of the table were higher than the undergraduates who did the same seats. These results were interpreted as showing that focusing on seating position was a tool for guessing the emotional status reflected by ego structure.

キーワード：座席位置, エゴグラム, 順応した子供

Key Words : Seating position, Egogram, Adapted Child

1. はじめに

人間は環境によって規定される面が大きく、環境を変えることによって、児童・生徒の諸問題が解決することも多い。例えば、転地療法や不登校児童の転校という措置等である。しかし、環境が人間に与える影響は統制すべき要因が多いため組織的に研究されているとはいえない。とはいえ、学校教育に関する研究の中では、座席の選択によってその選択者の心理的特性を明らかにする試みが行われている。例えば、渋谷(1986)は、大学生を

対象として、YG性格検査と座席位置の関係を検討した。その結果、不安定消極型(E型)の学生は、大きな講義室では最初に座席を大きく移動し、後に特定の空間の座席に固執する傾向のあることを明らかにしている。また、北川(1980)は、教室の前列や中央列に座る学生はYG性格検査の安定積極型が多いことを明らかにしている。さらに、北川(2003)は、教室の左右のゾーンに着席する者は、教員に対する心理的葛藤があること、教室の後方の座席選択をする学生は、授業に対する意欲が乏しいこと、前方の座席は授業に対して真面目に関わる学生及び

教員との親密度が高い学生が選択すること等が明らかにされている。古い研究ではあるが、Hare & Bales (1963) は、性格特性の中でもリーダーシップとの関連を示した研究として有名である。そこでは、長方形の机の短い辺と長い辺の中央の席は討議の方向性を支配し、リーダーシップがとりやすい座席位置であることが示されている。また、Dykman & Reis (1979) では、教室での座席位置と自己概念との関係も明らかにされている。

人間は、自分以外の人との距離(空間)を意識しながら、周りの人間との関係を維持している。例えば、電車の座席は、先に座っていた人の隣に座るのではなく、席を空けて座るし、座席の両端に座ることが多い。このような行動をとる背景には、他者が侵入してくると不快感を抱く空間の存在がある。このような空間をパーソナルスペース(Personal Space; 以下PS)と呼んでいる。PSは、Sommer (1969) によって提唱され、いわば、もち運びのできるなわばり空間であり、他人の侵入を許容しない、個人を取り巻く見えない境界をもつ空間とされている(本間, 2011)。渋谷(1990)によれば、PSは前方に広く、両側方から後方にかけては密である玉子型をしている。青野(1979)は、PSと対応する対人距離に注目し、男性は女性よりも大きい対人距離をとることを示している。また、年齢によって同性同士の距離は直線的に増大するが、異性同士の距離は思春期の前半を頂点として、曲線の変化をたどるといわれている。さらに、PSと心理的特性との関係も数多くの研究がある。例えば、不安(Leipold, 1963)、統制の位置(Duke & Nowicki, 1972)及び自己概念(Frankel & Barrett, 1971; Stratton, Tekippe & Flick, 1973)といった心理的特性である。

豊田・井上・多根井(2017)は、仮想された座席選択場面において選択する座席と、相互独立的-相互協調的自己観(高田, 2000)の関係を検討した。その結果、本研究の仮想場面1と同じ座席選択において短辺の座席を選択した者が他の座席を選択した者よりも独断性の高い傾向のあることが示されている。また、本研究の仮想場面3において長辺3席の右端座席を選択する者は、他の座席を選択した者よりも個の認識・主張が少ないことが明らかにされている。同じように、豊田・村田・多根井(2018)は、座席選択と被受容感及びエゴグラムとの関係を検討した。エゴグラムは、以下に示す5つの自我状態に対応する尺度から構成される(豊田, 2009)。

批判的な親(CP (critical parent)) 尺度: 「厳しい父親」尺度とされ、この尺度得点が高い者は、他人に対して批判的であり、厳しいが、責任感も強いという特徴がある。

養育的な親(NP (nurturing parent)) 尺度: 「やさしい母親」尺度といえる。この尺度得点が高い者は、共感性が高く、母親のように、他人を温かく受容し、世話好きな存在である。

大人の自我(A (adults)) 尺度: 「大人としての成熟度」尺度といえる。この尺度得点が高い者は、理性的、合理的であり、現実的に対応できる人である。したがって、現実への適応という意味では重要である。

自由な子ども(FC (free child)) 尺度: 「子どものような自由奔放さ」の尺度であり、得点の高い者は、子どものように明るく、自由奔放であり、感性や表現力が豊かであるが、感情的、衝動的という面もある。

順応した子ども(AC (adapted child)) 尺度: 「いい子ちゃん」の尺度であり、得点の高い者は、素直であり、周囲との協調性も高い。周囲の期待に応えようとする面が強い故に、自主性が乏しい面もある。

豊田ら(2018)の分析結果では、本研究での場面1における入口から遠い上座の座席選択をした者が、入口に近い下座を選択した者よりも被受容感の高いことがうかがえた。また、エゴグラムとの関係では、入口から遠い長辺の中心座席を選択した者が入口近くの下座に位置する座席を選択した者よりもFC得点が高かった。中心座席は、周りの者との会話を盛り上げてはしゃぐという自由奔放さが必要であるが、そのような自我状態が優勢な者がこの席を選択しやすい可能性を示唆した。一方、下座は自由奔放さが控えめな者が選択する可能性が高いと考察された。さらに、場面3において長辺3席の中心座席を選択した者は、それに隣接する下座席を選択した者よりもFC得点が高い傾向があった。これも上述したように周りの者との会話を盛り上げる自由奔放さが反映されたものと解釈された。

豊田ら(2017, 2018)は、大学生を対象とした座席選択と心理的特性との関係を検討した。しかし、20代後半以降の年長の成人を対象とした検討はなされていない。PSに関する研究では、年齢とともにPSが異なることも指摘されている(青野, 1979)。それ故、座席選択においても年齢差が見いだされる可能性がある。そこで、本研究の第1の目的は、豊田ら(2017; 2018)と同じ仮想場面を用いて、大学生と20代後半以降の中年群(29-59)及び高齢群(60歳以上)における座席選択の違いを検討する。また、エゴグラムに関しても年齢によって座席位置との関連は異なる可能性がある。したがって、年齢ごとの座席位置とエゴグラムの関係を検討するのが、本研究の第2の目的である。

2. 方法

2.1. 調査対象

大学生146名(男55, 女91)及び登録販売員109名(男96, 女13)が調査に参加した。登録販売者とは、各都道府県で実施される試験をパスし、ドラッグストア(薬店)や薬局などで一般用医薬品(薬局医薬品及び要指導医薬品以外の医薬品)の販売ができる医薬品販売に関する専

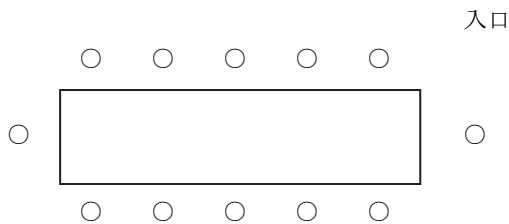
門の資格を有する者である。上記の大学生の平均年齢は19.1歳(18歳3か月～24歳6か月)、登録販売員のそれは57.99歳(29歳6か月～85歳2か月)であり、中年群(29歳6か月～58歳3か月;平均47.95歳)及び高齢群(60歳6か月～85歳2か月;平均68.21歳)にわけて分析された。大学生は第1著者の授業の受講生であり、調査の目的と、授業評価には一切関係ないこと、及び調査の参加は全く任意であることを説明された。また、登録販売員は第2著者の研修会の受講者であり、調査の目的及び調査への参加は全く任意であることが説明された。

2.2. 調査内容

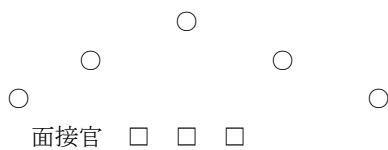
2.2.1. 仮想場面における座席の選択

豊田ら(2017, 2018)で用いた場面と同じ3つの仮想場面を設定し、各場面で自分が座る位置を選択させた。以下に、実際に用いた調査内容を示している。

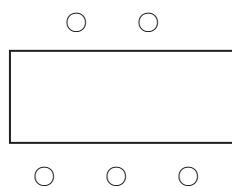
場面1 あなたは、同じ専修の友達12名で、夕食をするためにある店に来ました。座席は自由に選ぶことができます。さて、あなたは、どの席に座りますか？



場面2 あなたは、採用試験ではじめて会った人たち4名と、集団で面接を受けることになりました。自由に座席を選ぶことができます。さて、あなたは、どの座席に座りますか？



場面3 あなたは、ある教職に関するセミナーに参加し、はじめて会った人たち4名と、話し合っ、一つの結論を出すように指示されました。さて、あなたは、どの座席に座りますか？



2.2.2. エゴグラム

杉田(1990)による尺度を用いた。この尺度は、大学生用に表現を修正した簡易版である(豊田, 2003)。上述したCP(項目例「後輩がミスをする時、すぐにとがめめますか。」、NP(「人から道を聞かれたとき、親切に教えてあげますか。」、A(「感情的というよりも、理性的なほうですか。」、FC(「うれしいときや悲しいときに、顔や動作にすぐ表しますか。)」及びAC(「あなたは遠慮がちで、消極的なほうですか。)」の各尺度に対応する項目が10項目ずつ合計50項目から成っており、「はい」「いいえ」の2件法で回答するものであった。なお、原版では、「どちらでもない」という回答も含めた3件法であるが、豊田(2010)及び豊田ら(2018)と同じく、2件法を採用した。それ故、採点は「はい」を2点、「いいえ」を0点としてカウントする。このエゴグラムチェックリストは、A4判用紙に印刷された。

2.3. 調査手続き

第1の授業及び第2著者の研修会において、参加者の了承を得た上で、上述した「仮想場面における座席の選択」及び「エゴグラム」をそれぞれA4用紙に印刷したものを配布し、集団で実施した。調査終了後、参加者全員が提出に賛同して調査用紙を提出した。

3. 結果と考察

3.1. 場面1における座席選択とエゴグラム

Figure 1には、豊田ら(2017, 2018)において分析に用いた座席番号が示されている。ただし、豊田ら(2017, 2018)では、12席を別々に分析していたが、座席によって選択数の少ない場合もあり、分析が難しいことも指摘された(豊田ら, 2018)。そこで、本研究においては座席位置の特徴によって複数の座席をまとめてその座席グループ間の違いを分析することにした。具体的には、各辺の中心に位置する座席3, 6, 9及び12を中座席、上座に対応する1, 2, 10及び11を上座席、そして、下座に位置する座席4, 5, 7及び8を下座席として、これらの座席グループ間の比較を行った。

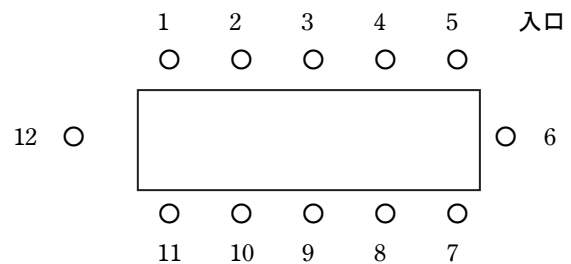


Figure 1 データ整理のための座席番号(場面1)

Table 1 座席グループごとのエゴグラムの得点 (場面1)

座席グループ	年齢群	エゴグラム				
		CP	NP	A	FC	AC
上座席 1, 2, 10, 11	大学生 <i>M</i> <i>n</i> =83 <i>SD</i>	8.58 3.50	15.52 3.13	9.83 3.58	13.47 3.74	11.13 4.58
	中年 <i>M</i> <i>n</i> =20 <i>SD</i>	14.50 1.99	12.95 2.31	14.25 2.24	14.95 2.56	16.05 2.37
	高齢 <i>M</i> <i>n</i> =22 <i>SD</i>	15.00 2.14	12.09 1.85	14.23 1.95	14.95 2.56	15.91 2.99
中座席 3, 6, 9, 12	大学生 <i>M</i> <i>n</i> =21 <i>SD</i>	9.05 3.61	15.62 3.67	9.81 4.24	13.43 4.61	10.86 5.09
	中年 <i>M</i> <i>n</i> =8 <i>SD</i>	15.38 2.33	12.13 2.30	15.50 3.02	13.50 2.27	19.38 12.24
	高齢 <i>M</i> <i>n</i> =9 <i>SD</i>	14.89 1.62	12.56 1.01	14.44 1.24	14.89 2.20	15.89 3.55
下座席 4, 5, 7, 8	大学生 <i>M</i> <i>n</i> =42 <i>SD</i>	8.76 3.30	15.19 4.26	10.05 4.04	12.43 3.60	12.86 4.35
	中年 <i>M</i> <i>n</i> =27 <i>SD</i>	15.89 2.34	12.59 2.21	15.30 2.13	14.89 2.33	15.22 2.87
	高齢 <i>M</i> <i>n</i> =23 <i>SD</i>	13.96 1.69	12.26 1.91	14.91 2.54	14.87 2.20	14.70 3.32

3.1.1. 座席選択

豊田ら(2017, 2018)と同じく、座席選択数に関しては、テーブルのセンターに位置する座席(3, 6, 9, 12)を選択する者が少ないことがわかる。中心的座席に座ることは、他者からの注目が集まり、集団の話題の中心になることを意味する。それ故、集団の話題の中心になるのを避ける傾向があることが追認されたといえよう。年齢による選択の違いを検討するために、各年齢群における座席グループの選択率を算出した。大学生群においては、上座席の選択率が56.85%、中座席のそれが14.38%、下座席のそれは28.77%、中年群においては上座席の選択率が36.36%、中座席のそれが14.55%、下座席のそれが49.09%、そして、高齢群においては上座席の選択率が40.74%、中座席のそれが16.67%、下座席のそれが42.59%であった。大学生は上座席を選択する率が高く、反対に中年群や高齢群は下座席を選択する率が高いことがわかる。これは、年齢によって座席選択の傾向が異なる可能性を示唆している。社会人になって、上座と下座という慣例を知ると、下座を選択する割合が高くなるといえよう。大学生は特にそのような意識はないようである。

Table 1には、それぞれの座席グループにおけるエゴグラム得点の平均とSDが示されている。

3.1.2. 座席グループごとのエゴグラム得点

エゴグラムの各下位尺度得点に対して、3(年齢; 大学生, 中年, 高齢)×3(座席グループ, 上, 中, 下座)の分散分析を行った。

CP CP得点に対する分散分析を行った結果、年齢の主効果のみが有意であり($F_{(2,246)} = 104.38, p < .001$)、下位検定の結果、高齢群と中年群が大学生群よりもCP得点が高かったが(ともに $p < .001$)、前2群間には差はなかった。したがって、批判的な親的自我状態は年齢による違いが明らかであり、年齢が高くなると、批判的な親的自我状態の高まる可能性が示唆された。ただし、中年群と高齢群の差はないので、一定の水準で停滞する可能性も示唆された。

NP NP得点に対する分散分析を行った結果、年齢の主効果のみが有意であり($F_{(2,246)} = 24.18, p < .001$)、下位検定の結果、CPとは反対に、高齢群と中年群が大学生群よりもNP得点が低かったが(ともに $p < .001$)、前2群間には差はなかった。したがって、養育的な親的自我状態は年齢が高くなると、低下する可能性が示唆された。中年群と高齢群の差はないので、一定の水準で維持される可能性も示唆されている。ただし、本研究の参加者が高齢群と中年群は登録販売員であり、その特性が反映されているのかもしれない。また、大学生も教員養成大学の学生であるので、養育的な親的自我状態は高いことが

知られており(豊田, 2011), 参加者の特性が反映されている可能性も考えられる。

A A得点に対する分散分析の結果, 年齢の主効果のみが有意であり($F_{(2,246)} = 54.64, p < .001$), 下位検定の結果, 高齢群と中年群が大学生群よりもA得点が高かったが(ともに $p < .001$), 前2群間には差はなかった。したがって, 大人の自我状態は年齢とともに高まる可能性が示唆された。ただし, これもCPと同じく, 中年群と高齢群の差はないので, 一定の水準で停滞する可能性も示唆された。

FC FC得点に対する分散分析の結果, 年齢の主効果のみが有意であり($F_{(2,246)} = 5.84, p < .01$), 下位検定の結果, 高齢群と中年群が大学生群よりもFC得点が高かったが(ともに $p < .001$), 前2群間には差はなかった。自由奔放な子供の自我状態は年齢の高い2群において大学生よりも強かった。ただし, 上記のCP, NP, A得点に比べて年齢の主効果は有意ではあるが, 大きくない。

AC AC得点に対する分散分析の結果, 年齢の主効果($F_{(2,246)} = 20.32, p < .001$)及び年齢×座席グループの交互作用($F_{(4,246)} = 2.43, p < .05$)が有意であった。この交互作用について単純主効果検定を行ったところ, 上座席において年齢の単純主効果が有意であり($F_{(4,246)} = 7.12, p < .001$), Ryan法による多重比較の結果, 中年群及び高齢群が大学生群よりもAC得点が高く($t = 4.42, t = 4.46$, ともに $p < .001$), 前2群間には差がなかった。したがっ

て, 上座席を選択する中年群や高齢群は大学生に比べて周りからの期待に応えようとする順応的自我状態が高いといえる。また, 中座席においても年齢の単純主効果が有意であり($F_{(4,246)} = 16.66, p < .001$), Ryan法による多重比較の結果, 中年群及び高齢群が大学生群よりもAC得点が高く($t = 4.59, t = 2.83$, ともに $p < .001$), 前2群間には差がなかった。したがって, 中座席を選択する者においても, 年齢の高い中年群や高齢群が大学生よりも順応的自我状態の高い傾向がうかがえる。一方, 下座席においては年齢の単純主効果は有意でなく($F_{(4,246)} = 1.40$), 下座席を選択する者においてはどの年齢においても順応的自我状態に顕著な違いのないことが明らかにされた。

上述したように, AC(順応的な子供の自我状態)得点においてのみ, 年齢と座席との交互作用が有意であった。座席選択に関しては, 周りからどのように見られるのかという意識が影響する。その意識は, 周りからの期待に応えようとする自我状態から生じる。それ故, AC得点に座席選択による違いが反映されやすかったのである。年齢が高くなると, 周りの者に気を遣い, 配慮することも多くなるが, 上座席や中座席の選択する場合には, 下座席を選択する場合よりもリーダー的役割をもつ可能性が高い。それ故, 周りを配慮する意識の背景にある順応的自我状態が増すといえよう。

Table 2 選択座席ごとのエゴグラム得点(場面2)

座席 グループ	年齢群	エゴグラム					
		CP	NP	A	FC	AC	
間座席 2及び4	大学生 $n=101$	<i>M</i>	8.48	15.25	9.92	12.97	12.22
		<i>SD</i>	3.51	3.68	3.61	3.84	4.29
	中年 $n=28$	<i>M</i>	15.39	13.00	14.93	14.86	16.43
		<i>SD</i>	2.10	2.38	2.32	2.49	6.87
	高齢 $n=36$	<i>M</i>	14.50	12.39	14.39	15.36	15.28
		<i>SD</i>	1.58	1.64	1.89	1.90	2.99
センター 3	大学生 $n=35$	<i>M</i>	9.26	15.89	10.00	13.83	11.03
		<i>SD</i>	3.33	3.22	4.09	4.01	4.69
	中年 $n=16$	<i>M</i>	15.44	12.63	14.38	14.38	16.06
		<i>SD</i>	2.39	2.28	2.16	2.42	2.28
	高齢 $n=6$	<i>M</i>	14.00	12.17	14.83	13.67	17.50
		<i>SD</i>	1.67	1.72	2.93	2.25	1.61
両端 1及び5	大学生 $n=10$	<i>M</i>	9.00	15.80	9.20	12.80	7.20
		<i>SD</i>	3.16	3.46	4.73	3.16	4.92
	中年 $n=11$	<i>M</i>	14.91	11.82	15.82	14.82	15.46
		<i>SD</i>	2.66	1.72	2.52	2.40	2.43
	高齢 $n=12$	<i>M</i>	14.92	11.83	14.92	14.17	14.67
		<i>SD</i>	2.84	2.12	2.50	1.80	3.88

3.2. 場面2における座席選択とエゴグラム

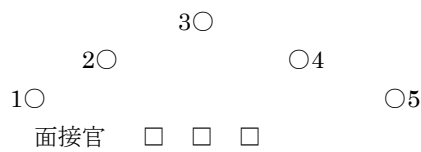


Figure 2 データ整理のための座席番号(場面2)

3.2.1. 座席選択

豊田ら(2017, 2018)において、Figure 2に示した両端の座席(1及び5)の選択数が少なかったため、その両端座席をまとめて一つの座席グループとし、座席2及び4を間座席、そして、座席3をセンター座席としてその選択数をカウントした。大学生の両端座席の選択率が6.85%、中年群のそれが20.00%、高齢群で22.22%であり、大学生が両端を選択する率が低いことがわかる。センター座席の選択率は、大学生が23.97%、中年群が29.09%、高齢群が11.11%であり、高齢群の選択率の低いことがわかる。さらに、間座席の選択率に関しては、大学生が69.18%、中年群が50.91%、高齢群が66.67%であり、中年群がやや低いもののいずれの群においても高い選択率を示している。全体的にみて、両端及びセンター座席ともに間座席と比べて、選択率が少ないという結果は、豊田ら(2017, 2018)と一致しており、両端は面接官から注目されにくい点、逆にセンター座席であれば、注目の程度が大きすぎるという心情が働いている可能性が指摘されている(豊田ら, 2018)。

3.2.2. 座席グループごとのエゴグラム得点

座席グループに対応するエゴグラムの各尺度得点の平均とSDが、Table 2に示されている。分散分析の結果、CP, NP, A及びFC得点に関しては、年齢の主効果のみが有意であり、場面1の結果に示したような年齢による違いであった。しかし、AC得点については、年齢の主効果($F_{(2,246)} = 24.93, p < .001$)とともに、座席グループの主効果($F_{(2,246)} = 4.16, p < .05$)が有意であった。座席グループの主効果に関してRyan法による多重比較を行った結果、間座席とセンター座席が両端座席よりもAC得点が高く($t = 2.60, p < .01; t = 2.50, p < .05$)、前2者間には有意差はなかった($t = .33$)。両端座席は、面接官からの注目を受ける可能性が少ないので、これらの座席を選択する者は、周りの期待に応えようとする順応的自我状態の低いことがうかがえる。

3.3. 場面3における座席選択とエゴグラム

Howell & Becker (1962)は、場面3と同じような場面を実際に設定し、その場面でのどの座席に座るかによって、議論のリーダーシップをとる可能性を検討している。そ

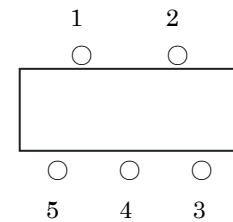


Figure 3 データ整理のための座席番号(場面3)

の結果、2つの座席のいずれかに座った者が、3つの座席のいずれかに座った者よりもリーダーシップをとる可能性が2倍以上であったことを明らかにしている。したがって、Figure 3に示した座席1と2(上2席)と座席3, 4及び5(下3席)を座席グループとして、選択数及びその座席に対応するエゴグラムの各尺度得点の平均とSDを算出した。その結果が、Table 3に示されている。

3.3.1. 座席選択

上2席選択率は、大学生群が67.81%、中年群が38.19%、高齢群が33.34%であり、大学生が他の2群よりも上2席を選択する割合が高かった。反対に下3席は中年群及び高齢群が大学生よりも選択率が高いことになる。これは明確な座席選択における年齢差であるといえよう。この年齢差がどのような要因によって規定されているのかは明確ではないが、PSが年齢ともに変化すること(青野, 1979)と関連している可能性はある。しかし、年齢ともにPSは大きくなると考えられていることから、PSが小さくなる下3席を選択する率が中年や高齢群で高まることは矛盾する。この点については、PS以外の他の要因を考慮する必要がある。

豊田ら(2017, 2018)では、3席の列の中心の座席(座席4)の選択数が少なく、両端を囲まれるという位置はPSを侵害されるという認識のために、敬遠される傾向がうかがえた。本研究においても、座席4の選択率は、どの年齢においても低いが(大学生群では11.64%、中年群では18.18%、高齢群では16.67%)、下3席に含まれる座席間に選択率の顕著な違いはない(大学生群では座席3が10.96%、座席4が11.64%、座席5が9.59%、中年群では座席3が20.00%、座席4が18.18%、座席5が23.64%、高齢群では座席3が25.93%、座席4が16.67%、座席5が24.07%)。

3.3.2. 座席グループごとのエゴグラム得点

座席グループに対応するエゴグラムの各尺度得点の平均とSDが、Table 3に示されている。分散分析の結果、CP, NP, A, FC及びAC得点のすべてにおいて、年齢の主効果が有意であったが、座席グループの主効果及び座席グループ×年齢の交互作用は有意でなかった。した

Table 3 選択座席グループごとのエゴグラム得点 (場面3)

座席グループ	年齢群	エゴグラム					
		CP	NP	A	FC	AC	
上2席 1及び2	大学生 <i>n</i> =99	<i>M</i>	9.05	15.43	9.68	13.39	11.47
		<i>SD</i>	3.44	3.57	3.79	3.76	4.68
	中年 <i>n</i> =21	<i>M</i>	14.90	13.38	14.67	14.57	17.38
		<i>SD</i>	2.34	2.56	2.67	2.98	7.83
	高齢 <i>n</i> =18	<i>M</i>	14.83	12.11	14.00	15.28	16.11
		<i>SD</i>	1.82	1.53	1.71	2.16	2.74
下3席 3, 4, 5	大学生 <i>n</i> =47	<i>M</i>	7.96	15.45	10.34	12.68	11.83
		<i>SD</i>	3.35	3.53	3.78	3.98	4.57
	中年 <i>n</i> =34	<i>M</i>	15.56	12.21	15.12	14.79	15.35
		<i>SD</i>	2.22	1.90	2.11	2.04	2.44
	高齢 <i>n</i> =36	<i>M</i>	14.39	12.31	14.83	14.72	15.03
		<i>SD</i>	1.96	1.86	2.27	1.91	3.42

がって、上2席と下3席という座席グループ区分によっては、エゴグラムにおける差異は検出できないといえよう。豊田ら(2017, 2018)と同じように、座席グループではなく、座席ごとにエゴグラム得点の分析も行ったが、そこにおいても座席グループの主効果及び座席グループ×年齢の交互作用は有意でなかった。

豊田ら(2017)では、大学生が調査対象であったが、座席3を選択した者が座席1や座席4を選択した者よりも相互独立-協調的自己観における独善性が低かった。中年群や高齢群のデータ数を増やすことで、下3座席のセンターに位置する座席4と両端の座席3及び5の違いが見いだせるかもしれない。

4. 結論と今後の課題

本研究は、長方形卓を使用した際の仮想場面における座席選択の年齢差及び座席選択とエゴグラムの関係を検討した。座席選択の年齢差に関しては、場面2については、顕著な年齢差がみられず、どの年齢においても両端及びセンター座席ともに間座席と比べて、選択率が少ないことが明らかになった。しかし、場面1において大学生は上座席を選択する率が高く、反対に中年群や高齢群は下座席を選択する率が高いことが明らかになった。また、場面3においては、大学生が他の2群よりも上2席を選択する割合が高く、下3席は中年群及び高齢群の選択率が高かった。これらの結果は、座席選択において年齢差のあることを明らかにしたのである。この年齢差がどのように要因によって規定されるのかは、年齢によるPSの変化、社会人として生活する上での慣習の影響等が考えられるが、現時点では今後の検討課題である。

座席選択とエゴグラムとの関係においては、AC(順

応した子供の自我状態)得点において関係が見いだされた。すなわち、場面1において上座席及び中座席を選択する中年群や高齢群は同じ座席を選択する大学生に比べて周りからの期待に応えようとする順応的の子供的自我状態が高いことが明らかになった。また、場面2においてはどの年齢群においても、間座席とセンター座席を選択した者が両端座席を選択した者よりもAC得点が高かった。どの年齢においても、両端座席は、面接官からの注目を受ける可能性が少ないので、これらの座席を選択する者は、周りの期待に応えようとする順応的的自我状態が低いことがうかがえた。

豊田ら(2017)では、大学生における座席選択と相互独立-協調的自己観の関係、豊田ら(2018)では、同じく大学生における座席選択との被受容感及び被拒絶感の関係及びエゴグラムの関係を明らかにした。そして、本研究は、豊田ら(2017, 2018)と同じ仮想場面を用い、座席選択の年齢差と、年齢に関わるエゴグラムと関係を明らかにすることができたのである。また、分析方法を修正して、個々の座席による分析から座席グループによる分析への移行も行った。今後は、これらの分析方法の妥当性及び適切性を検討するとともに、これまで検討してきた個人差特性以外の特性と座席位置との関係を検討していく必要がある。特に、場面3の仮想場面に対応するHowell & Becker(1962)の結果から、リーダーシップに関する尺度との関連を検討することは重要であろう。

引用文献

- 青野篤子 1979 対人距離に関する発達の研究 実験社会心理学研究, 19, 97-105.
- Duke, M. P., & Nowicki, S., Jr. 1972 A new measure and social-learning model for interpersonal distance. *Journal of Experimental Research in Personality*, 6, 119-132.
- Dykman, B. M. & Reis, H. T. 1979 Personality correlates of classroom seating position. *Journal of Educational Psychology*, 71, 346-354.
- Frankel, A. S., & Barrett, J. 1971 Variations in personal space as a function of authoritarianism, self-esteem, and racial characteristics of a stimulus situation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 37, 95-98.
- Hare, A. P. & Bales, R. F. 1963 Seating position and small group interaction. *Sociometry*, 480-486.
- Howells, L. & Becker, S. 1962 Seating arrangement and leadership emergence. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 64, 148-150.
- 本間道子 2011 パーソナルスペース「キーワードコレクション 社会心理学」二宮克美・子安増生(編)新曜社 176-179.
- 北川歳昭 1980 座席行動の研究(Ⅱ):教室内の座席行動と性格特性 中国短期大学紀要, 11, 32-45.
- 北川歳昭 2003 教室空間における着席位置の意味 風間書房
- Leipold, W. E. 1963 Psychological distance in a dyadic interview as a function of introversion-extroversion, anxiety, social desirability, and stress. Unpublished doctoral dissertation. University of North Dakota. (Dykman & Reis, 1979による).
- Stratton, L. O., Tekippe, D. J., & Flick, G. L. 1973 Personal space and self-concept. *Sociometry*, 36, 424-429.
- 渋谷昌三 1990 NHKブックス『人と人の快適距離 パーソナル・スペースとは何か』日本放送出版協会
- Sommer, R. 1967 Small group ecology. *Psychological Bulletin*, 67, 145-152.
- 高田利武 2000 相互独立的-相互協調的自己観尺度に就いて 奈良大学総合研究所所報, 8, 145-163.
- 豊田弘司 2010 大学生における自我構造, 自尊感情及び随伴経験の関係 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 19, 1-5.
- 豊田弘司・井上紗智・多根井重晴 2017 大学生における座席位置と相互独立-協調的自己観の関係 奈良教育大学紀要, 66, 23-30.
- 豊田弘司・村田史恵・多根井重晴 2018 座席位置と被受容感・被拒絶感及び自我構造の関係 奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要,